

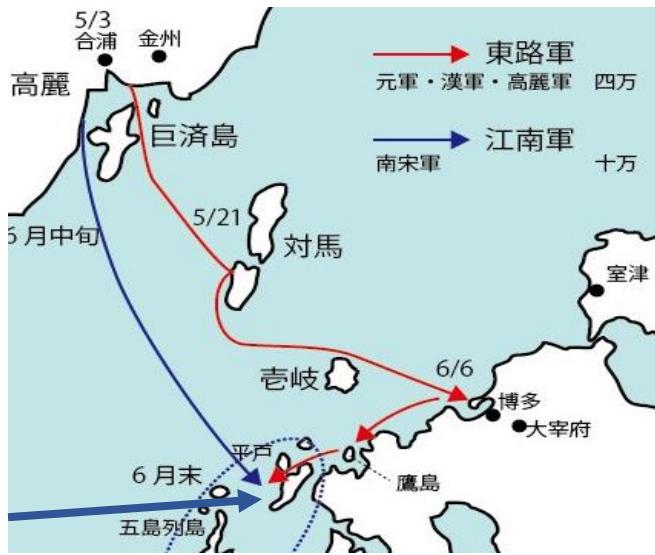
歴史通信

令和2年12月7日

第12号

社会科 青木慎弥

最強鎌倉武士～元寇合戦記～（後編）



お待たせしました今回は鎌倉武士の元寇合戦記第二段「弘安の役」です！

前回の文永の役では3万の軍勢が日本に攻めてきましたが今回は14万の軍勢が来ます！えっ何でそんなに数が増えてるの？となりますよね。それにはいくつかの理由があります。そもそもなぜ元が日本に侵攻してきたかと言うと、マルコポーロも関係するのですが、1274年の文永の役の前に、日本には黄金が信じられないくらいたくさんあり、日本王の住む御所は屋根が全て金で、床は4センチもの分厚い黄金でできているという話をフビライ=ハンが聞き、興味を持ったのと、もう一つは元の南方にある南宋（中国）がまだ元に従わず戦闘中でした。その南宋に日本から火薬製造に必要となる硫黄が輸出されていたというのがありました。つまり、まず南宋を倒したい、そこで日本が南宋の味方をするのを防ぎたいというのもありました。だから元の主力は南宋攻略に送っているので、文永の役の時は日本には3万しか送れなかったのです。しかし1281年の弘安の役のときは、南宋を滅ぼした1276年の後だったので、日本侵略に本気を出せたわけです。後は南宋の兵が反乱を起こさないために日本に送ったという説もあります。

1275年、元が7度目の使者を送ってきます。北条時宗はあろうことかその使者5人の首をはねます。毎度のことながら時宗の心の強さには驚かされます。ちなみに1279年に8回目の使者が来ますが、これも斬首に処します。

そしてとうとう1281年（弘安4年）高麗から元・高麗軍を主力とした東路軍約4万人、軍船900艘と中国方面から旧南宋軍を主力とした江南軍約10万人、軍船3,500艘、両軍の合計、約14万人、軍船4,400艘の軍が日本に向けて出航します。元の作戦は「東路軍と江南軍は壱岐島で6月15日に合流し、その後博多湾から大宰府を落とす」という計画でした。しかし、東路軍は意外と早く5月3日には高麗を出発し、5月21日に対馬に上陸しています。しかし、ここでまたもや対馬の鎌倉武士が激しく戦い、将が2人討たれています。しかし何とか対馬を落とし、5月26日に壱岐に上陸し、激しい戦闘の末、壱岐を落とします。ここで江南軍と合流するのを待つはずだったのですが、博多の武士達が配置転換をしているという情報を得て、まだ日本軍は戦闘準備が整っていないと思い、チャンスだと思って博多湾に向かいます。6月6日東路軍は博多湾に侵入します。そこで東路軍はびっくり仰天します。日本側はすでに防衛体制を整えて博多湾岸に約20kmにも及ぶ石築地を築いていました。この石築地は、最も頑強な部分で高さ3m、幅2mになっており、日本側が守備する内陸方面からは騎乗しなが

ら駆け上がれるように土を盛っており、海には乱杭や逆茂木（さかもぎ）などの上陸を防ぐ妨害物を設置していました。しかも湾には多数の船が配置され鎌倉武士が待ち構えていたのです。元軍はさすがにこれは上陸できないと考え、その浜の向かいにある志賀島に上陸します。そこで博多を攻略するための拠点を作ろうとしたわけです。しかし、鎌倉武士はそれを黙って見過ごすほど甘くはありません。一応博多湾を守る武士の作戦は防衛戦だったので、勝手に抜け駆けすることは禁止されていたようですが、天下の鎌倉武士が目の前の志賀島に獲物がいるのにガマンできるはずもありません（笑）夜中にこっそり草野次郎という唐津の武士が小舟に乗って元の船に乗り込み、元兵 21 人の首を取って船を焼き払ってかえってきます。それを見た他の武士も次々に勝手に小船に乗って我先にと元に襲いかかります。野生の猛獣か！？というくらい鎌倉武士はぶつ飛んでますよね（笑）元からしたら「あれっ？ こっちが日本に攻め込んできたのに何でこっちが襲われてるの？！」という感じですよね！ さらに 6 月 8 日には志賀島は鎌倉武士によって総攻撃を受けて、元はたまらなく志賀島から脱出し、壱岐に逃げます。そこで江南軍 10 万人が来るのを待ち、もう一度博多を攻めようと一旦待機します。しかし相手は鎌倉武士です。我慢できるはずがありません。次々に壱岐に船で乗り付け、元軍を襲います。鎌倉武士の頭には博多防衛戦という作戦は完全に忘れ去られていたようです。東路軍も頑張りますが、約束の 6 月 15 日になっても江南軍は訪れません。たまらなく東路軍は壱岐を脱出し江南軍の来る方角にある長崎県にある平戸・鷹島に行きます。そこでやっと東路軍は江南軍 10 万人と合流します。さあ博多湾に突入しようかと思ったら、何と、鎌倉武士は執拗に鷹島にまで追いかけて攻めてきました。これには元軍もビックリ！ もはやどっちが侵略軍か分かりません。そして連日激しい戦闘が行われ、元軍は博多には一歩も近づけず防衛戦になりました。そこで 7 月 30 日の夜中から翌日 7 月 1 日にかけて台風が来ます！ 船と船の間隔を空けていた部隊はあまり被害がなかったみたいですが、船の間隔が狭かった部隊は船同士が衝突し沈んでいったそうです。そこで元の司令官はもう日本に上陸するのは無理と判断して、鷹島に 10 万の兵を置き去りにして、自分たちだけ元に逃げ帰ります。かわいそうなのはこの残された 10 万人の元軍の兵士達。完全に鎌倉武士の餌食となります。鎌倉武士が完全に包囲して徹底的に掃討戦を行った結果、何とこの 10 万人の内、元に逃げ帰れたのは 3 人、高麗にたどり着けたのは 11 人だけだったそうです。この後、北条時宗は 4 年を待たず亡くなります。あまり触れられなかったのですが、元寇の勝利は北条時宗のリーダーシップと政治的手腕があつてこそです。正に元寇から日本を守るために生まれてきたような人でした。

ところで「やっぱり奇跡の神風で勝ったんやん！」と思うのはあまり正しくないです。台風シーズンは主に 7 月から 10 月の 4 ヶ月間で、北九州に台風が上陸する回数は年平均 3.2 回です。3 ヶ月もの間、元軍は北九州にいて、1 回しか台風にあっていないですから、むしろ少ない方です。そして何より鎌倉武士が元軍を一度も九州・博多に上陸させなかつたことと、台風後も 10 万人以上の元軍が健在だったことを考えると、勝因は鎌倉武士が強すぎたという結論が妥当だと思います。ちなみに台風の来た 7 月 30 日はもちろん旧暦です！ では新暦では何月何日でしょうか？あと「あれ？」と思った人も多いと思いますが 7 月 30 日の翌日が「閏 7 月 1 日」と書いてありましたよね！ これも不思議ですよね！ なぜ 2 回 7 月がくるのかも調べてみましょう！

さて、2 度に渡って元寇合戦記を書いてきましたが、大事なのはこの後です！ 13 世紀では世界最大の海戦であったこの戦いの後、日本・元・高麗はどうなったのでしょうか？ これは調べる前にまず理論を立てて、予想をして、それから答え合わせをしてみましょう！ 「歴史は必ず繰り返す」と言いますよね！ 過去の歴史から元寇後の未来を予想していきましょう。この「未来を予測する訓練」を繰り返すことが歴史を学ぶ上でとても大事なことです。いわゆる「温故知新」ですよね！ 将来社会人になったとき、未来をしっかりと予想できる力を身につけましょう。合言葉は「歴史を知れば未来が分かる！」です。